

「体験して分かったこと」

早稲田佐賀高等学校 3年 谷川且誼

バケツをひっくり返した様な雨、下校時には、JR唐津線は運転を見合わせた。両親に電話をする
が、そんな日に限って出てくれない。五時に代替バスが出ると聞き、とりあえずそれに乗った。バス
は、信号機もない笹原峠辺りで止まった。十分、二十分経過しても進む気配がなかった。三十分ほ
ど経過したところで、前方でがけ崩れが発生し交通規制があっていると車内放送があった。

突然緊張が走った。ここは大丈夫だろうか。真っ黒に立ち込めた雨雲で、午後6時というのにあたり
りは暗くなっていた。雨はさらに強くなっていった。1時間経過しても動かない。周りは完全に暗くな
り、不安は増すばかりだ。

母親から電話がきた。バスの中で待つように。とにかく、自己判断はせず運転手の指示に従うよう
に念を押された。

その時、初めて自然災害に巻き込まれた当事者だと自覚した。出口が見えない状況で、二時間
以上時が流れた。とても不安だった。

元来、佐賀県は地震・津波・水害など自然災害がきわめて少ない地域である。吉野ヶ里に代表さ
れる弥生時代の集落が発達したのも、そのような地理的条件があったからだろう。

両親や先生も他県で自然災害の報道があるたびに、佐賀県は自然災害がないから安心だ、住
みやすい県だと繰り返し言っていた。事実、私も今まで自然災害に会ったことはなかった。

バスの中で、思いもよらぬ状況になり不安は恐怖心へ変わっていった

偶然と油断で自然災害に巻き込まれる。JRが動いていれば、両親に電話がつながれば、もう少
し早くこの場を通過していれば、そして、自然災害が自分を襲うことがないと油断したことが、頭
の中で次々と思いが廻った。

一面水没した佐賀市内、いつも通っている佐賀駅構内も浸水し、ロータリーには錦鯉が泳いで
いた。一晩で街の姿が一変していた。自宅へたどり着いたのは夕方だった。

近年集中豪雨が多発し、広範囲で甚大な被害を出しているのは、明らかに地球温暖化による異
常気象の影響だ。今は異常気象だと思っているが、人類が本気で温暖化に歯止めをかけない限り、
日常的な気象となってしまう危険がある。

それを防ぐため、人類の二酸化炭素排出量削減と緑色植物の二酸化炭素の吸収を、同時並行
に早急に取り組む必要がある。

取り組み方には、大きく二つがあると思う。一つは、国際機関がリードし、国や企業団体が主体と
なって取り組む方法だ。例えば、パリ協定の批准と実行であり、また、大企業独自の二酸化炭素削
減の取り組みのようなものだ。これらは、規模が大きく、また監視の目も強いと思われるので、どちら
かという主導的な対策となるだろう。

また、もう一つは、市民レベルの取り組みだ。一つ一つの取り組みは小さいと考えられるが、積み
重ねることによって、とてつもない力になると考えている。例えば、節電や石油製品のリサイクルな

どもそうだ。自家用車を使わず、少々不便を感じても公共交通機関を使うこともそうだろう。また、全世界の人々が、一本の苗木を植えることも大きな力になるはずだ。

今、世界中の森林は減少の一途をたどっている。

ある機関の試算では、毎年四国と同面積が砂漠化しているとしている。一度砂漠化すると、塩類集積により緑地帯再生は極めて困難である。また、強い日差しと降水量の多い熱帯雨林地方が一度裸地になると森林再生は、人為的手助けが必要となる場合が多い。しかし、現実には、最近も話題になっていたが、ブラジル各地で森林火災が発生し裸地の発生が続いている。一部では、宅地開発や農地開拓のため、故意に火をつけているとの情報もあるが、これは地球の自殺行為に等しい。近年の自然災害の多発、特に近県で発生した二年連続の豪雨を受け、私も何らかの行動を起こす必要があると感じた。そして、意を決して、昨年夏、植林ボランティアとしてベトナムへ行った。

四十年以上前の戦争で失われた森林再生が今も続いているのが現実である。一度失われた、森林を再生するのは時間を要するのだ。

地球環境を守り異常気象を防止するには、現存する森林を保全するのが最も効率の良い方法である。同時に、全世界の人々が少しでも多くの木々を植林する活動をしてほしい。植林活動に参加して分かったことだが、苗が根付き大きな森林を形成するのは簡単なものではない。その土地に合った樹木の選定も必要だ。指導員に案内された土地は一面枯れ木の広場だった。昨年植林した木々がすべて枯死したと言うことだ。この土地に合わなかったと言われた。ただ、無駄な行為でもないと言われた。「この土地に、この枯れた木が合わないことが分かったことが一歩前進だ」この言葉はとても印象に残っている。植林は、ただ穴を掘り木を植えるだけの行動ではない。地道で、気が遠くなる作業であることが分かった。その点からも、世界の多くの人々が、一本でも多くの木を植えてほしい。

また、現実的に化石燃料を使用せず生活を維持することは現実的ではない。使用量を最小限に抑え、効率よく使い、再生可能エネルギーとの共用も必要だ。この春、佐賀県の青少年交流プログラムの一員として、エネルギー先進国オランダを訪れた。もちろん、省エネの取り組みを体感したかったし、また、循環型社会の取り組みも興味を引いた。

例えば、オランダでは、政府が企業や環境団体と協議し、二千五十年までに利用する資源を100%リサイクルにする目標を設定し、二千二十五年までにプラスチック製品を100%再利用する目標を立てていた。また、再生可能エネルギーの割合も高い。全エネルギーの20%に、風力発電の割合を引き上げる政策目標を持ち、家畜糞尿等によるバイオマス発電システムの先進国でもある。実際、昔ながらの風車と混在し、最新型の風車が多数設置されていた。

佐賀市の下水処理場でもバイオマス発電は行われているが、施設内の電力を補うのが精いっぱい状況だ。一方オランダでは、国内鶏糞量の三分の一で、九万戸分の電力を供給できるバイオマス発電所が始動していた。

実際訪れたオランダは、多くの国民が原動機関を利用せず、自転車を利用していた。そのため自転車道整備も充実し、自動車道と同等の規模で整備されていた。また、市内での自転車のシェアも進んでおり、主な駅にはシェア自転車が整然と止めてあった。ホストファミリーに不便を感じな

いか尋ねたところ、地球環境の将来を考えると何の疑問も感じないと胸を張って答えていた。私たち日本人も大いに見習うべきだと痛感した。また、昔ながらの風車と混在し、最新型の風車が多数設置されていた。

日本人のエネルギー利用の姿勢は、まだまだ見直しが必要で、発展途上であり、地球環境を考えたオランダ人を前にして恥ずかしさを覚えた。しかし、このプログラム参加は、今から社会の一員となり世界を支えていく私には、貴重で有意義な体験となった。